

1. 研究主題

学習の楽しさを味わい、主体的に学ぶ子どもの育成
～説明的文章の読みを通して思考力を高める国語科学習指導の工夫～

2. 研究主題設定の理由

教職員アンケートによる児童の実態から、本校の児童は基礎学力の定着に課題が見られ、文章の内容を確かに読み取ったり、自分の思いや考えを言葉で説明したりする力が、語彙力の不足も伴い十分ではないと把握できている。

そこで本年度は、国語科の「読むこと」に重点を置き、確かな読みの方策を身に付け、自分で読みをつくる子どもの育成を目指して研究に取り組みたい。

確かな読み
とは

日本語を正確に理解するとともに、文章で表現された内容や事柄を正確に理解することである。つまり、言語の意味を知識として記憶するだけでなく、言語で表現されたことを理解し、既習事項や生活経験に基づいて解釈することである。

そこで、書かれた文章の内容をこれまで身に付けた言語感覚で受け止め、目的に応じた的確に理解し、自分なりに豊かに想像することと捉える。

「思考力」
とは

思考力とは、単に「教材としての文章の内容を正確に読み取る力」だけでなく、読んだことをもとに自分なりの考えをもつ力のことであると考え。つまり、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域を貫く力のことであり、「情報を取り出し」「解釈」「熟考・評価」する力のことである。ここで思考力を身に付けさせるためには、

○読む力～叙述にそって、文章を正確に読む力

○考える力～叙述をもとに根拠を明確にし、自分の考えをもつ力の育成が必要であると考え。

なぜ
説明的文章

小学校学習指導要領の中学年（3年生、4年生）の「読むこと」の指導事項には次のようなことが明示されている。

説明的文章・・・中学年「目的に応じて、中心となる語や文をとらえて、段落相互の関係を事実と意見との関係を考え、文章を読むこと」

文学的文章・・・中学年「場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと」

学習指導要領の指導事項によると、説明的文章と文学的文章の指導には明確な違いがあることが分かる。説明文は事実と意見を読み取ることに対して、文学的文章は想像して読むことである。

研究を始めるにあたり、行間を読む文学的文章よりも本校児童の課題である叙述の解釈、文章の構造把握に重点をおいた説明的文章に焦点をあてて系統的に捉えていくことから進める。ここで言葉にこだわり、叙述をもとに筋道立てて読み、ものの見方・考えを広げていく。そのための授業改善とともに学習規律・学習習慣などの環境づくりも図ることで、児童の学習意欲を高め、読みの力を確かなものにしていきたい。

学習の楽しさ
とは…

本時の工夫

子どもたちの問題意識と学習の目標が合致したとき、子どもたちは自ら動き出し、言葉への関心を高めつつ、意欲的に学習に取り組む。この瞬間に学習の楽しさが生まれると考える。

相手意識をもった楽しさ・単元のゴールに向かう学ぶ過程の楽しさ・分かる楽しさ

課題提示→読み（認識）→意見交流（表現）→あれっ？（問題意識）＝学習の目標

単元構成の工夫

はじめ

活動のゴール・〇〇作り等

説明的文章の読みを経て、学習のゴールに児童が楽しさを感じる活動を構成する。そのことで児童に深く読み取ろうという意識が生まれる。

効果的な言語活動の設定や単元計画の工夫を進め、国語科の授業の充実を図ることで児童の学力向上を目指したいと考え、本研究主題を設定する。

3. 研究主題の具体化

（1）研究仮説

説明的文章の授業づくりを通して、「言葉による見方・考え方」を豊かにし、子どもが言葉や言葉同士の関係に着目して、意味づけを図るようにする。加えて、言葉へのこだわりをもたせ、筆者の意図を理解させる。このような言葉の力を育てていくことで、確かな読みの力を身に付け、豊かに思いを表現する子どもの育成ができる则认为。

国語の説明的文章における「読むこと」の学習において、次のような手だてや指導の工夫を行うことにより、叙述から筆者の意図を理解し、自分の思いや考えをもち主体的に考え、対話を通して共に高まり合える児童を育成することができる则认为。

（2）研究主題の具体化に向けて

①叙述の解釈

説明的文章における文章の解釈については、本や文章に書かれた内容を理解し、価値付けである。今までの読書経験や体験を踏まえ、内容や表現を想像、分析、比較、対照、推論などによって相互に関連付けて読んでいく。文章の内容や構造を理解したり、その文章の特徴を把握したり、書き手の意図を推論しながら、読み手は自分の目的や意図に応じてまとめたり深めていく。

②言葉へのこだわり

音読の工夫し、辞書の活用を積極的に取り入れることで、言葉の意味や書かれている内容を正確に読む力の育成につながる。

- ・授業の中で、キーワードに着目して考える際に取り入れる。
 - ・児童が知らない、理解していない言葉については、辞書を引き、全員で確認する
- ☆国語辞典の使い方を定着させる
- ☆調べようとする言葉の終止形を確認する。

③音読を効果的に取り入れる

- ・発達段階に応じた音読方法を取り入れる。
「句点。」「読点、」を意識させて音読→形式段落読み→意味段落読み
- ・言葉(キーワード)に着目させる。
- ・言葉の意味や内容を正確に理解させる。
- ・言葉の意味を深く考え、イメージを広げさせる。

④資料提示読み（資料と文章の対応を明確にさせる）

- ・語尾上げ読み、「か」「よ」「ね」読み（問いの文を見つけさせる）
- ・主語読み（主述関係を捉えさせる）
- ・中心文を見付けさせる。
- ・具体的な説明部分に気付かせる。
- ・事例の順序に気付かせる。
- ・事実に対する筆者の考えの変化に気づかせる。
- ・筆者の主張を読み取らせる。

⑤児童の実態把握と教材研究

確かな言葉を学んでいく子どもたちを育てるためには、教材研究を充分に行う必要がある。

- ・教科書の読み解き方。
- ・児童の実態に合わせた単元計画の設定。
- ・学習のねらいを明確にした課題設定。
- ・板書計画により学習の流れを明確にする。
- ・発問計画を吟味する。
- ・机間指導の適切なタイミング。

(3) 研究の視点

2つの視点を設定して、仮説の検証を図っていく。

視点1 「学習の楽しさ」を生み出す教材化・単元構成

「楽しさ」に結びつく単元の構成、ゴールの工夫

- ・読む力を高める単元の指導計画の工夫

視点2 正確に理解し適切に表現する資質・能力を育ていく学習展開

課題設定の工夫、発問計画、児童の考えを引き出す工夫

- ・思考力を高める一時間の指導過程の工夫
- ・学習意欲を高める指導技術の工夫

4. めざす児童像

低学年部会	時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えることができる児童
中学年部会	段落の中心となる語や文を捉え、段落の相互関係に着目しながら、自分の思いや考えとその根拠について主体的に考えることができる児童
高学年部会	事実と感想、意見等との関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握することができる児童

5. 読む力の素地を育成するための日常的な活動での指導

(1) 学習規律の徹底

①学習の流れを示す

- ・めあて→音読→課題提示→個人・グループ思考→全体思考→ふりかえり
- ・「めあて」「ふりかえり」を毎時間取り入れる。

②学習環境づくり（ユニバーサルデザインの視点から）

- ・前面(ホワイトボード上)に掲示はしない。
- ・「声のものさし」「話し方あいうえお」「聞き方あいうえお」を発達段階に応じて掲示する。
- ・板書や掲示物の文字の大きさ、色、配置、情報量などに配慮する。

(2) 基礎学力の定着 ベーシックタイム（短時間学習）の活用

- ・言語事項の学習については、練習、確認テストを行う。
- ・確認テストについては、時間内に解答まで行える内容にする。（プリントや問題集の活用）

(3) 読書活動の取組

- ・朝読書、ボランティアによる読み聞かせ。
- ・自主的な読書活動へ。

(4) 詩の掲示およびふれあい掲示板の活用

- ・文字に触れ、交流する場としての環境づくりを行う。